

御津小学校区

1 歴史・風土・産業

「御津」の地名の起源をたどると、明治22年、町村名を決める時に『播磨風土記』を根拠として名付けられたらどうかということによる。風土記には「御津息長帯日売命（おきながたらしひめのみこと）に船の泊故に、御津と号す」とあり神功（じんぐう）皇后が三韓征伐に行く途中船をとめられた泊であるということから「御津」と名付けられた。

「室津」は、古く象和5年(838年)には「檜生」という名で内海の良港として繁栄している様子が『続日本書紀』に出ている。

「室のごとく静かな津」ということで「室の泊」と呼ばれたのがその始まりと伝えられ、『播磨風土記』には、「この泊、風を防ぐこと室のごとし 故に困りて名をなす」と記されている。

御津町は、南は播磨灘に面し、東は揖保の流れを臨み、冬の寒気は北の山地にさえぎられ、山・川・海にはぐくまれ、気候温暖にして風光明媚である。豊かな耕地では、米づくりをはじめ、成山新田での野菜づくり、綾部山梅林での梅の収穫などが行われ、室津港・岩見港では漁業や牡蠣の養殖も盛んで、それぞれの特色を生かした四季折々の特産品を生産している。また、国立公園に指定された美しい海岸線（新舞子）や広大な綾部山梅林・世界の梅公園、国指定重要文化財の賀茂神社をはじめ歴史と文化を今に伝える室津の町並みなどには、年間を通じて多くの観光客が訪れる。

戦後は、瀬戸内工業地帯の一翼を担う姫路地区に隣接する恵まれた立地条件から、工業と宅地の開発が盛んで、文字どおり「光と緑と水」に恵まれた、活気あふれる町である。



2 先人の活躍

(1) 肥塚 龍

嘉永元年1月10日岩見庄中島村（御津町中島）に生まれる。24才で横浜毎日新聞の主筆となる。大隈重信に起用され第3回衆議院選挙で政界入りをする。明治31年初代東京府知事に就任、衆議院議員に8回当選し副議長となる。

(2) 堀 林之助

明治2年御津町黒崎に生まれる。明治末期から大正初期にかけて、揖保郡長、兵庫県議会議員議長を歴任し、地方議会で活躍した。その間、当時国有林であった黒崎基山の地元払い下げに奔走し、今日の観光地としての礎を築いた。神戸市の舞子に風景が酷似しているため「新舞子」と名付けて宣伝した。

(3) 丸尾 重次郎

御津町中島に生まれる。若い頃から農業に熱心であった。自分の田の一部分にとてもきれいな粒で穂の重い稲が成長しているのを発見した。その後改良を重ね、茎が丈夫で短め、風雨に倒れにくく中粒のきれいな米を作り出すことに成功し、さらに収穫量も多くすることができた。のちに、この稲を「神力（しんりき）」と名付け、その発明者である重次郎を「神